

神社の杜(十四)

大追跡

ビジターセンター  
所長 片柳 茂生

この追跡劇があったのは、昨年の冬、しかも雪の降った翌日のことだった。ビジターセンターの有能な解説員であるI女史が、新雪に覆われた大塚山に調査に行ったときのことである。

まだ誰も歩いていない雪道を

歩くことの満足感と、膨らみはじめた冬芽やほころびだしたマンサクの花などを愛でながら歩いていた時である。山の斜面より一筋の足跡が道に現れた。足跡の幅が等間隔で直線的につくこの足跡は十中八九キツネのものを見て間違いない。女史は、この足跡をずっと追うのが今日の私の使命だと感じ、追跡することに決めた。

キツネはしばらくの間規則正しい歩幅を保って進み、雪上の所々に黄色いシミを残している。なわばりを知らせるためのおしっ



イラスト 井口三月

こらしい。あまりにも単調な足跡に女史は半ば飽きていた。と、突然足跡は道から外れ、道を挟んで斜面を行ったり来たりするようになった。キツネが獲物の気配を感じ、探しまわっているように見える。よく見るとその

あたりにはキツネの足跡だけでなく、1cmくらいの小さい足跡、そして足と足の間には尻尾をずっと細い線も着いている。ネズミである。キツネはネズミを探したようであった。うであるが、あちこちに掘ったトンネルを利用して移動しているネズミを捕らえることはできなかったようである。

大塚山山頂に到達したキツネは、表示板におしっこをかけたあと山中に消えてしまった。これ以上追跡はできないと判断し

た女史は、あきらめてビジターセンターに戻ろうとして大塚山を下り巻道に出た。するとそこでもまた足跡が現れたではないか。気を取り直して追跡を再開する。道に沿って歩き、時には走ったりして足跡は富士峰園地まで続いた。そしてこのキツネの目的が何であったのか判明した。それは、富士峰園地にある展望食堂から出た残飯を求めて、はるばるねぐらのある大塚山から

くまがいそう あつもりそう  
熊谷草 敦盛草



アツモリソウ クマガイソウ  
イラスト 神田 忠良

幻の山野草と言われる「クマガイ草」の名は、花の形が熊谷次郎直実が鎧の背につけ、矢の当るのを防ぐ、母衣に見立てたものと言

われています。同じラン科の「アツモリ草」は、やはり袋状の唇弁風になびくこの母衣を思わせます。平敦盛は源平一の谷の合戦で熊谷直実に討たれた平家の若武者でした。いずれも日本各地に生育していましたが、今では大変めずらしい山野草に数えられます。クマガイ草は山村・山やぶのなかに群落をなしていますが、アツモリ草は、山地の草原で日当りのよいところに生えます。御岳山では、あちこちの民家の庭先で四月下旬から五月中旬まで見られます。

あ と が き

コンピューターの誤作動が騒がれていましたが、何事もなく穏やかに暖かな元旦を迎える事が出来ました。「光陰矢の如し」やわらかくやさしい木々の芽ぶきとともに十四号お届け致します。

川越市古谷上 宿講・杉浦栄治様、齋藤慎一先生、玉稿を賜わり誠にありがとうございました。御獄では四季折々諸々の行事があります。是非共にご参加下さいますようお願いしております。

平成十二年三月八日発行

編集 武蔵御嶽神社  
（年二回発行・非売品）

印刷 楳成和印刷  
☎0496(七〇)八五〇